

第二百四十六話 国力の限界を超えた先に来るものは？

本メモランダムは、基本的に、大東亜戦争に係る戦略や作戦・戦闘に焦点を当てていたが、それだけでは本戦争の全体を理解するのは至難である。とある新書（「日本軍兵士」吉田裕著 中公新書）に、日本軍兵士の悲惨な実態が包括的に記述されていた。悲しくもあり、痛ましく辛い話でもあり、目を背けたいのはやまやまだが、敢えて、その要点を簡略に記述して日本自戒の糧としたい。

1 同書が主対象とした大東亜戦争の時期

同書の類書が他に見当たらなかったのも、本メモランダムの内容は同書からの引用であることを前もって断っておきたい。本書に取り上げられている軍医将校等の証言や部隊史の記録等々は、大東亜戦争末期、日本軍の敗勢著しく、太平洋の各島嶼では玉砕が相次ぎ、或いは補給なく絶望的な状況であり、又は大陸でも泥沼の戦いとなり、軍も兵士も倦んでいた、そんな1944年夏頃（マリアナ諸島のサイパン失陥は1944/7/9）からの一年間の記録から見える日本軍兵士の実態である。

2 日本軍兵士の死因に関する分析結果

日本軍人・軍属の戦没者230万人の大部分がサイパン島陥落後である。

(1) 戦病死が圧倒的

1941年時点の、全戦没者に占める戦病死者の割合は、50.4%であるとされ、対米英蘭戦開始後の当初は兎も角、末期の過酷な状況を考えると、戦病死者の割合は更に格段に増大していると推定される。

(2) 餓死者の大量惹起

ある研究者の推計では、栄養失調による餓死者と栄養失調に伴う体力消耗の結果マラリアなどに罹患して病死した広義の餓死者は、140万人（61%）としているが、それは過大だとして37%を提示している研究者もいる。戦争栄養失調症なる極度の痩せ、貧血、慢性下痢等を主症とする患者が続発したという。生ける屍、血涙溢る。

(3) 海没死 35万人超

特異な戦傷として、圧抵症、水中爆傷がある。突然発狂する者も続出。PTSDだろう。

(4) 特攻死 陸海軍合計で4160名である。

(5) 自殺 形式上は戦死、戦病死と区分される場合多し。 外国軍に比して高率

(6) 残置せざるを得ない傷病者への対応

ジュネーブ条約に則り措置されるべきであったが、自決を促す等の対応

(7) 自傷者対応 死ではないが、自傷者も発生している。

3 兵士の身体的特性の変化

(1) 現役徴集率の増大に伴う兵士の体格・体力等の低下

1937年の徴集率は25%であったが、1944年には77%であった。当然のことながら体格・体力の低下は元より兵士としての適格性に問題のある者の入隊も多くなった。知的障害、結核、虫歯等々への対応が課題となった。

(2) 戦争神経症等 精神疾患患者の増大

(3) 疲労回復 疲労（戦力）回復剤ヒロポンの多用（剤多用による副作用等）

日本軍には、休暇制度はあったが、レク設置の発想も施設もなし

4 被服・装具の劣化拡大

軍服の素材粗悪化、鮫皮・無鉄軍靴、孟宗竹の代用飯盒や水筒、背嚢が背負袋に水虫の蔓延（トレンチフット）

5 国力の限界超え(破断界)、日本精神主義の根強さ、近代化の遅れ等々が考えられるが、悲しくもなる。軍も意を用いたのだが・・・

(了)